

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：32604

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14356

研究課題名（和文）不況の知覚が内集団の範囲を狭めて曖昧成員への攻撃を促進するプロセスの解明

研究課題名（英文）The process by which perceived recession promotes narrowing the range of in-groups and aggression toward ambiguous members

研究代表者

竹部 成崇（Takebe, Masataka）

大妻女子大学・文学部・講師

研究者番号：10822314

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000 円

研究成果の概要（和文）：第1に、先行研究で示されていた「資源不足を知覚させると内集団成員が外集団成員が曖昧な人物を外集団成員と判断しやすくなる」という知見が（少なくとも現在の日本では）再現されないことを明らかにした。第2に、資源不足がゼロサム信念を介して外集団成員排斥意図を促進するというモデルは、研究方法（シナリオ実験・プライミング実験・大規模社会調査の二次分析）によって支持されたりされなかったりすることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

上述した1つ目の成果は、資源不足による内集団の狭隘化が態度や行動より前の「知覚」という段階において「非意識的に」生じうるという、理論的・社会的インパクトのある知見に疑問を呈するものである。2つ目の成果は、資源不足が外集団成員排斥意図に及ぼす影響およびそのプロセスについての理解を深めるものであるとともに、今後、資源不足の影響を明らかにしようとする際に用いるべき研究方法についてのヒントとなるものである。

研究成果の概要（英文）：First, we demonstrated that the finding from previous research -that people are more likely to judge racially ambiguous individuals as out-group members when they perceive resource scarcity- is not replicated (at least in contemporary Japan). Second, we showed that the model suggesting resource scarcity promotes out-group exclusion or un-inclusion via increased zero-sum beliefs receives variable support depending on the research method used, such as vignette experiments, priming experiments, and secondary analysis of large-scale social surveys.

研究分野：社会心理学

キーワード：不況 資源不足 内集団の狭隘化 排斥 ゼロサム信念 外国人労働者 移民 プライミング

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

2016 年、イギリスで EU 離脱が決まり、アメリカではイスラム入国禁止令が支持されるなど、研究開始当初、反グローバリズム的な風潮が世界的に見られ、規模の大きい集団が (e.g., アメリカ) それを構成する下位集団 (e.g., ヨーロッパ系、アフリカ系、アラブ系) へ分裂する傾向が強まっていた。こうした風潮は様々な摩擦を引き起こす可能性があり、実際に暴動が増加している地域もあった。

心理学領域の研究は、こうした現象の背後に、不況 (資源不足) の影響がある可能性を示唆していた。具体的には、不況 (資源不足) を知覚すると、内集団成員か外集団成員か曖昧な人物 (e.g., biracial) を、外集団成員と判断しやすくなることが示されていた (e.g., Rodeheffer et al., 2012)。これは、歴史的経緯などの個別具体的な文脈を排除しても、不況 (資源不足) を「知覚」するだけで内集団の範囲を狭める認知傾向が人に備わっていることを示す重要な知見であった。

## 2. 研究の目的

他方で、どのようなプロセスで不況 (資源不足) の知覚が内集団の範囲を狭めるのかは、明らかにされていなかった。また、不況の知覚が、研究開始当初の世界各地で起きていたように、曖昧成員 (内集団成員か外集団成員か曖昧な人物) への攻撃にまで影響を及ぼすかどうか、明らかでなかった。そこで本研究では、不況 (資源不足) の知覚が内集団の範囲を狭め、曖昧成員への攻撃を促進するプロセスを明らかにすることを試みた。

## 3. 研究の方法

### 研究 1 : 資源不足プライミングが集団成員性判断に及ぼす影響

まず、先行研究 (e.g., Rodeheffer et al., 2012) で示されている通り、資源不足を知覚すると、内集団成員か外集団成員か曖昧な人物 (e.g., biracial) を、外集団成員と判断しやすくなるか検証した。加えて、ゼロサム信念が資源不足知覚の効果を調整するかどうかを検証した。上記の現象が内集団の広さ由来のリスク (i.e., 資源欠乏のリスク) を低減するためであるならば、資源はゼロサムでない (パイは増大しうる) と考えている場合は、資源不足を知覚しても曖昧成員を排除する必要性が低いと考えられたためである。

研究 1a は質問紙実験であった。まず、ゼロサム信念を「良い仕事を得る在日外国人が増えることは、良い仕事を得る日本人が減ることを意味する」といった文章に同意する程度を回答してもらうことで測定した。続いて、乱文再構成課題を用いて資源不足の知覚を操作した。乱文再構成課題とは、4 つの単語を選び出し、意味の通る文を完成させる課題である。資源不足条件では、「なかなか、流した、決まらない、就職が、不況で」といった単語が、統制条件では「なかなか、流した、決まらない、予定が、次の日の」といった単語が提示されていた。最後に、東アジア人の平均顔と白人 (あるいは黒人) の平均顔を様々な割合で合成した顔を提示し、それぞれについて、日本人と白人 (あるいは黒人) のどちらとする方が適切だと思うかを回答してもらうことで、内集団の範囲を測定した。

研究 1a の結果を受け、研究 1b, 1c では、研究 1a と異なる方法で資源不足知覚を操作する実験を行った。具体的には、研究 1b では暗記課題と称して画像と短い文章を呈示した。資源不足条件では不況を示す画像や記事が、資源充足条件では好況を示す画像や記事が呈示された。研究 2b では、アナロジー問題を解いてもらった。資源不足条件では、「汗 : 夏 = 負債 : \_\_\_\_」という問題と「不況・大学・経済・希少」という回答選択肢などが、統制条件では、「\_\_\_\_ : 有袋目 = サル : 霊長類」という問題と「フクロネズミ・類人猿・ミツバチ・ヘラジカ」という回答選択肢などが示された。ゼロサム信念の測定方法や集団成員性判断課題は研究 1a と同一であった。なお、研究 1b, 1c も質問紙実験であった。

研究 1b, 1c の結果を受け、研究 1d では、研究 1a の直接追試を行った。

研究 1d の結果を受け、研究 1e では実験室で実験を行った。内容はおよそ研究 1a, 1d と同じであったが、集団成員性判断課題を PC 上で実施した。その際、顔刺激を 1 つずつ呈示するとともに時間制限を設けた。

研究 1e の結果を受け、研究 1f では、研究 1a, 1d の直接追試を行った。

最後に、研究 1a ~ 1f までの結果を受け、元研究とできるだけ同じ方法を用いて、元研究の約 10 倍のサンプルサイズで、Open Science Framework にて事前登録 (Preregistration) を行った上で、Rodeheffer et al. (2012) の追試実験を行った。具体的には、資源不足あるいは資源充足を示すスライドショーを見てもらった後に、1 人の日本人と 1 人のインド人の顔を平均化することで作成された 20 のバイレイシャルな顔を 1 つずつ呈示し、南アジア人と東アジア人のどちらとみなす方がよりの確か回答してもらった。

## 研究2：資源不足プライミングが外集団成員排斥を導くプロセス - シナリオ実験による検討 -

研究1の結果を受け、当初の研究計画を変更することとした。具体的には、内集団成員か外集団成員か曖昧な人物(e.g., biracial)の集団成員性認知や彼らに対する攻撃行動を扱うのではなく、外集団成員(e.g., 外国人労働者)に対する受け入れ/排斥意図を扱うこととした。また、研究1では、ゼロサム信念は資源不足の効果を調整する要因と考えていたが、研究2では、ゼロサム信念は資源不足が外集団成員排斥に及ぼす影響を媒介する要因であると考えた。関連研究や論理的考察から、資源不足とゼロサム信念は独立していないことが考えられたためである。

研究2aでは、資源不足と資源可変性を操作した実験を行った。参加者が大学生であったため、場面は部活とした。具体的には、ある部活動で新歓係のリーダーになった大学生として、目標新入部員数を何人に設定するか判断してもらった。資源不足条件では、近年の不況の影響で学校経営に余裕がないため、部の予算が年々減少しており、このままでは活動が十分にできなくなると記述されていた。資源充足条件では、近年の好況の影響で学校経営に余裕があるため、部の予算が年々増加しており、従来の活動をしてもお金が残るようになってきたと記述されていた。また、資源不変条件では、学校から各部への配当金額は一律で固定されていると記述されていた。資源可変条件では、各部への配当金額は部員数や前年度の実績によって柔軟に決められていると記述されていた。

研究2aでは、「資源不足 ゼロサム信念 外集団成員排斥」というプロセスを直接検討していなかったため、また、例数設計や事前登録をしていなかったため、続いて研究2bを行った。研究2bでは、資源不足を操作し、ゼロサム信念と排斥意図を測定した。クラウドソーシングサービスで募集した一般人が参加者であったため、場面は会社とした。具体的には、中小企業に勤める人事として、翌年の新入社員を何人にすべきか判断してもらった。資源不足条件では、近年、会社の業績が不況の影響で悪化しており、経営が苦しくなっていることが描写されていた。統制条件では、会社の業績は会社の業績は堅調で、経営は安定していることが描写されていた。ゼロサム信念は、「新入社員が多くなるほど、1人当たりのボーナスは少なくなる」といった文章に同意する程度を回答してもらうことで測定した。なお、研究2b以降、すべての研究で予備実験に基づく例数設計、OSFへの事前登録を行っている(研究4は既存データの二次分析であるため例数設計は行っていない)。

研究2c, 2dでは、異なる文脈で研究2bと同様の仮説を検証した。具体的には、ある架空のA国に居住する一国民として、政府の外国人労働者受入拡大方針(研究2c)あるいは外国人労働者帰国推進方針(研究2d)に対する賛否を回答してもらった。資源不足条件では、A国の景気は近年、悪い状態であり、失業率が高く、給料も上がらず、物もあまり売れず、財政に余裕がないことが描写されていた。統制条件では、A国の景気は近年、堅調な状態で、失業率は高くなく、給料も微増しており、物もそれなりに売れており、財政にある程度余裕があることが描写されていた。ゼロサム信念は「外国人労働者が増えるほど、A国で生まれ育った人の生活は苦しくなる」といった文章に同意する程度を回答してもらうことで測定した。

研究2eでは、資源不足下でもゼロサムでないことを示唆すれば外国人労働者受入拡大方針への反対は弱まるかを検証した。具体的には、資源不足条件では、研究2cの資源不足条件と同じシナリオを読んでもらった。資源不足かつ非ゼロサム条件では、それに「近年の研究では、A国のような国では外国人労働者が増えることで、生活必需品を中心に需要が増加するとともに、

イノベーションにより新たなビジネスが創発され、市場が拡大し、経済が発展し、国および国に居住する人みんなが豊かになっていくことがわかっています。政府はこういった研究を踏まえて、上記の方針を発表したようです」という文章が加わったシナリオを読んでもらった。ゼロサム信念の測定方法は研究2cと同一であった。

## 研究3：資源不足プライミングが外集団成員排斥を導くプロセス - プライミング実験による検討 -

研究2はあくまでシナリオ実験であり、架空の場面における行動意図を扱っていた。そこで研究3では、プライミング実験を用いて、現実の態度を扱い、「資源不足 ゼロサム信念 外集団成員排斥」というプロセスを検証した。

研究3aでは、まず、「情報の要約のされ方を調べる実験」と称して、450字程度の文章を70~120字に要約してもらった。資源不足条件では近年の不況を示す文章が、統制条件では景気とは無関連な文章(i.e., 家の鍵を探すのがなかなか見つからないという文章)が呈示された。なお、予備調査で資源不足条件の文章は資源不足感を高めるがネガティブ感情・ポジティブ感情には影響しないことが確認されていた。要約課題の後、「様々なことに対する考え方の調査」と称して、日本政府が外国人労働者の受け入れを拡大するとしたら賛成か反対か、ゼロサム信念などについて回答してもらった。ゼロサム信念を測定する項目は、「外国人労働者が増えるほど、日本に元々いる人の生活は苦しくなる」などであった。

研究3aの結果を受け、研究3bでは、予備実験と研究3aの合算データを基に例数設計し、研究3aの直接追試を行った。

## 研究4：資源不足プライミングが外集団成員排斥を導くプロセス - 大規模社会調査データの二次分析による検討 -

研究2はあくまでシナリオ実験であり、架空の場面における行動意図を扱っていた。そこで研究4では、大規模社会調査データを用いて、現実の態度を扱い、「資源不足 ゼロサム信念 外集団成員排斥」というプロセスを検証した。

個人レベルの変数に関するデータは World Values Survey (WVS) から取得した。より具体的には、WVS time-series data-set (Inglehart et al., 2020) に含まれている、1994 年～1998 年に実施された第3波と2005 年～2009 年に実施された第5波のデータを用いた。この2波のデータを用いたのは、これらのみがゼロサム信念と外国人労働者の受け入れに対する態度の両方を測定していたためである。国レベルの変数は先行研究(e.g., Ramos et al., 2022; Sirola & Pitesa, 2017)に倣い、World Bank (2022)が提供している World Development Indicators (WDI) database から取得した。ただし、WDI database にデータがなかった場合は、他のデータベースを探し、可能な限り欠損値が出ないようにした。

分析の際は、第3波と第5波のデータそれぞれに対し、マルチレベル媒介分析を行った。マルチレベル分析を行ったのは、WVS データが「国 - 個人」という階層的な構造を持つデータであるためであった。各波で別々に分析を行うのは、第3波が実施された国は55ヶ国、第5波が実施された国は58ヶ国である一方、両方の波が実施された国は34ヶ国のみであり、波もレベルとして加えた3レベルで実施するとデータが著しく失われ、セレクション・バイアスが生じる危険性があるためであった。

## 4. 研究成果

### 研究1：資源不足が集団成員性判断に及ぼす影響

研究1aでは、仮説通り、ゼロサム信念が高い場合には、資源不足条件の方が統制条件より日本人でないと判断した回数が有意に多かった一方、ゼロサム信念が低い場合には、資源不足条件と統制条件の間に有意な差は見られなかった。ただし、資源不足プライミングの主効果は先行研究と異なり、非有意であった。研究1aと異なるプライミング方法を用いた研究2b, 2cでは、ゼロサム信念の高低にかかわらず、資源不足プライミングの効果は見られなかった。研究1aの直接追試である研究1dでは、パターンは研究1aと同じであったが、有意差は確認されなかった。教場で質問紙を用いるという方法ではなく、実験室で行った研究1eでも、資源不足プライミングの効果は確認されなかった。研究1a, 1dの直接追試である研究1fでも、資源不足プライミングの効果は確認されなかった。これらの結果を受けて最後に行った、元研究とできるだけ同じ方法を用いて、元研究の約10倍のサンプルサイズで、Open Science Framework にて事前登録(Preregistration)をした上で行った、Rodeheffer et al. (2012)の追試実験でも、資源不足プライミングの効果は確認されなかった。まとめると、資源不足プライミングが集団成員性判断に及ぼす影響(主効果)は一度も確認されなかった。また、ゼロサム信念の調整効果も、1度確認されたのみであった。

### 研究2：資源不足が外集団成員排斥を導くプロセス - シナリオ実験による検討 -

研究2aでは、予測通り、資源不変条件でのみ、資源不足条件の方が資源充足条件より、目標新入部員数を有意に少なく設定していた。研究2bでは、予測通り、資源不足はゼロサム信念の高まりを介して翌年の新入社員を減少させていた。研究2cでも、予測通り、資源不足はゼロサム信念の高まりを介して外国人労働者の受入拡大方針に対する反対度を強めていた。研究2dでも、予測通り、資源不足はゼロサム信念の高まりを介して外国人労働者の帰国推進方針に対する賛成度を高めていた。研究2eでも、予測通り、資源不足下でもゼロサムでないことを示唆すれば外国人労働者受入拡大方針への反対は弱まっていた。まとめると、シナリオ実験を用いた研究2からは、資源不足はゼロサム信念の高まりを介して外集団成員排斥を促すことが示唆された。また、資源不足下で生じる外集団成員排斥は、資源はゼロサムではないことを伝えることで抑制できることも示唆された。

### 研究3：資源不足が外集団成員排斥を導くプロセス - プライミング実験による検討 -

研究3aでは、仮説を支持する結果は得られなかった。また、研究3bでも、仮説を支持する結果は得られなかった。研究3aは予備実験データを基に、研究3bは予備実験と研究3aのデータを基に例数設計した実験である。そのため、(少なくとも今回の方法による)資源不足感の操作はゼロサム信念および外国人労働者受入拡大方針に対する態度に影響を与えないと結論づけるのが妥当だと考えられた。

#### 研究4：資源不足が外集団成員排斥を導くプロセス - 大規模社会調査データの二次分析による検討 -

失業率はゼロサム信念と関連しておらず、ゼロサム信念と外国人労働者受入に対する態度も関連していなかった。失業率とゼロサム信念が関連していないという結果は、同じく WVS データを分析した Siroła & Pitesa (2017) とも矛盾する結果であった。今後は、探索的分析として、失業率以外の指標 (e.g., GDP) を用いた分析も行う予定である。

#### 研究成果の総括

研究1では、資源不足プライミングが集団成員性判断に及ぼす影響の再現性(あるいは一般化可能性)が低いことが示唆された。

研究2では、資源不足が外集団成員排斥を導くプロセスが明らかにされたとともに、資源不足下で生じる外集団成員排斥を抑止する糸口が示唆された。しかし現実の態度を扱った研究3, 4では、研究2とは矛盾する結果が得られた。そのため現時点では、資源不足が高まったゼロサム信念を介して外集団成員排斥を促進するという証拠は不十分な状態である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Takebe Masataka, Tsumura Kenta, Nakashima Ken'ichiro	4. 巻 5
2. 論文標題 Resource scarcity priming and face perception: A preregistered conceptual replication of Study 1 of Rodeheffer et al. (2012) in Japan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Current Research in Ecological and Social Psychology	6. 最初と最後の頁 100169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.cresp.2023.100169	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹部成崇・中島健一郎
2. 発表標題 資源不足がゼロサム信念を介して内集団の範囲に及ぼす影響 - 新入社員数を決めるという文脈を用いたシナリオ実験 -
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会第67回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹部成崇
2. 発表標題 資源不足がゼロサム信念を介して内集団の範囲に及ぼす影響
3. 学会等名 第189回社会行動研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹部成崇・中島健一郎
2. 発表標題 景気と集団資源可変性が内集団の広さに及ぼす影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第61回大会
4. 発表年 2020年

1．発表者名 竹部成崇・中島健一郎
2．発表標題 不況の知覚とゼロサム信念が内集団の広さに及ぼす影響
3．学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 竹部成崇・津村健太・中島健一郎
2．発表標題 資源不足ブライミングと顔知覚 - 日本におけるRodeheffer et al. (2012) のStudy1の事前登録済追試 -
3．学会等名 日本社会心理学会第64回大会
4．発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本グループ・ダイナミックス学会大会で優秀学会発表賞を受賞（コミ文・竹部専任講師） <a href="https://www.otsuma.ac.jp/news_research/info/68112/">https://www.otsuma.ac.jp/news_research/info/68112/</a> 竹部成崇先生の論文が国際的な社会心理学の雑誌に掲載されました <a href="https://www.lit.otsuma.ac.jp/commublog/?p=329">https://www.lit.otsuma.ac.jp/commublog/?p=329</a>
---

6．研究組織			
	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	中島 健一郎	広島大学・人間社会科学研究科・教授	
	(Nakashima Ken'ichiro)  (20587480)	  (15401)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------